

第4室 仏具 展示解説

N-242 舍利塔（しゃりとう）

『古今目録抄』（N-18）によれば、もと法隆寺の舍利殿に安置されていた。基壇の上に伏鉢形の塔身と寄棟造の屋根、火焰宝珠付きの相輪を備えた宝塔形の舍利塔である。法隆寺の役僧であった覚巖（かくごん）によって保延4年（1138）に修理されたことを示す墨書があることから、制作時期は11世紀末から12世紀はじめにさかのぼる可能性がある。

N-71 木画経箱（もくがきょうばこ）

素地の表面と内部に香木の木画を貼った被印籠蓋造（かぶせいんろうぶたづくり）の箱である。表面には菱形と三角形に切りそろえた沈香（じんこう）を格子状に並べ、底部には沈香の樹皮を貼る装飾が見られる。8巻本の「法華経」（N-12）が納められていたと伝えられる。

N-300 葛箱（かずらばこ）

もともとは被蓋造（かぶせふたづくり）になる箱の身の部分で、いまは蓋を失っている。素地（芯）に細い葛を並べ、その周囲に細く裂いた葛の皮を巻きつけながら編み上げ、竹製の縁を細い籐を巻きつけてとめる。全面を蘇芳（すおう）で赤く染めてから漆を塗り、側面には二重菱と四菱繋ぎの文様を編み出している。達磨大師（だるまだいし）所用と伝えられる「袈裟」（N-35）が納められていた。

N-279 壺鉢（そくはつ）

肩がやや張るが、口縁の窄まり方が弱く、なだらかな輪郭をみせる器形の鉢である。壺（そく）は、型に布を押しあて漆で貼り重ねて成形する技法で、中国では夾紵（きょうちよ）と呼ばれ、すでに漢代（前2世紀）から行われていた。わが国では奈良時代に仏像の制作に盛んに用いられ、乾漆（かんしつ）とも呼ばれる。

N-278 木鉢（もくはち）

木製の木地を轆轤（ろくろ）挽きで成形し、布貼りの上にかなり厚く下地を施し、漆を塗って仕上げている。口縁がすぼまり、肩の部分が張り出し、底が尖ったいわゆる鉄鉢（てつぱつ）形をしているが、全体的にふくよかで穏やかな形をしている。達磨大師（だるまだいし）の所用品という寺伝がある。

N-284 如意（にょい）

如意は、元来は孫の手の手で、これを用いれば意の如（ごと）くなることから、この名がある。仏教では、僧が説法の際にこれを手にして威儀を整える儀式用具として用いられた。奈良時代の如意は、概して頭部が小さいが、時代が下ると雲形に変化してゆく。

N-241-1 百万塔（ひゃくまんとう）

天平宝字 8 年（764）藤原仲麻呂（恵美押勝）の乱の後、称徳天皇（在位 764～770）の発願で滅罪と鎮護国家のために制作された、木造轆轤挽（ろくろびき）の三重小塔である。塔身上部の筒状孔には、紀年の明らかな現存する世界最古の印刷物として著名な陀羅尼経が納入されていたが、法隆寺献納宝物中の 48 基の百万塔ではすべて失われている。